
桂花と幼馴染

もやち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桂花と幼馴染

【Nコード】

N2341Z

【作者名】

もやし

【あらすじ】

桂花と幼馴染のお話を好き勝手に作者が書きます。

…完全に作者が楽しむ為の作品です、笑

作者が別で一応本気で書いている「魏 END後…新しい始まり。」が現在、myPCが無い為にゆっくり書けなくなったので、それまでの繋ぎみたいな感じで携帯更新専用でキーワードにあるように行

き当たりバッタリの作者思いつき小説として書かせて頂きます。

どんな話になっていくかは…作者の気分次第です。

とりあえず下さった、感想や意見には必ず返信致しますので何かありましたら何でも

桂花と幼馴染（前書き）

さて、今日から新しく「桂花と幼馴染」を書かせて頂きます。

もやちと言います。一応、私が一番好きな桂花たんと同性です、笑

あらすじ・キーワードにありますように駄文の塊になる可能大の作者自己満小説になる予定ですので、少し見て頂いて体調に変化が起こった方は直ぐに見るのを止めた方が… オイ！！

あ…

「」は声に出している声

『』は声に出してない声

「『』なしは地の文

とご理解下さい。

本文を見られる前にもう一度「あらすじ」・「キーワード」を見られる事をオススメ致します。

…

…もう何でも良いと思った方だけ本編どうぞ オイ！！笑

桂花と幼馴染

「もつすぐね。」

とある場所のとある場所で小さな女の子が外見には不釣り合いな難しい文字の書かれた大きな本を開いていた。その女の子は本を開いていながら視線はどこか違う方を見ていた。

「それにしても相変わらず…」

その女の子は自分の座る場所から横に見える通りの歩いている異性を見ながら呟いていた。

「それにしても、どうしてこの世に男が存在したのかしら？あゝ気持ち悪いわ。何なのあの視線…きつと私達女をいやらしい視線で…に、妊娠でもしたらどうするのよ…！」

『アイツ以外の男なんて…』

「桂花」

「へっ…キャ…！」

突如、女の子の座る椅子が掛けられた声と同時に後ろに下げられた。

「ち、ちよつと急に何するのよ…！落ちて怪我でもしたらどうしてくれるのよ…！」

「こんな天気の良い昼間からそんな分厚い本読んで勿体ないだろ。」
椅子を下げて女の子を驚かせた彼の名前は孫劉曹・真名は周と言いつこの女の子の幼馴染にあたる。外見も特に特徴も無く何処にいてもおかしくない普通の青年である。

「アンタには関係ないでしょ。この鍛練バカ。」

そしてこの幼馴染にきつくあたる女の子が、この物語の主人公のジユンイク・真名は桂花である。

「せっかく太陽が出てるっていうのにこんな日陰で分厚い本なんか読みやがって…歩こうぜ…！」

「ち、ちよつと…！私は本を…」

桂花は周に掴まれた腕に抵抗する間もなく街を歩き始めた。

「今日の鍛練は終わったの？」

「ああ、今日は軽めだったんだ。」

周は別に軍に所属してる訳じゃない。ただ、軍に入った時の為に毎日鍛練を欠かさない。

「アンタ、鍛練も良いけどもう少し頭も鍛えなさいよ。」

「いや…勉学は…」

「昔から良くないものね。」

「うるせい。しかし、桂花は凄いやな。その勉強が認められて冀州の袁紹様の所に行くんだろ？」

「え、ええ。」

『アンタ分かってるの？つまり私が此処を出て行くって事なのよ？』

「寂しくなるなあ。」

「えっ！！」

周の予想外の言葉に桂花が思わず声を洩らした。

「だってそうだろ？俺と桂花は昔からずっと一緒だったじゃん。何か兄弟みたいに育ったしさ。」

「兄弟…ね。はあ。」

周の言葉に桂花は溜め息を漏らした。

「ん？どうかした桂花？」

「何でも無いわよ。」

「それにしても桂花が此処を出て行くと思つと色々思い出すよ。」

「…ロクな記憶が無いわね。」

「おいつ！！お前がそんなだから友達もロクに出来ないんだよ。」

「そんなもの必要無いわよ。」

『私には1人いれば…それでいいもの。』

「友達は重要だぞ。袁紹様の所に行ったら良い友達作れよ…特に異性の。」

「無理ね。」

「あのなあ。いつまでも男嫌いーで通用しないぞ。しかし、どうしても俺以外の男は全員ダメなんだろうな。」

桂花は幼馴染の周を覗いて全ての異性が嫌いである。

「そ、そんな事知らないわよ。」

『なんとなくは分かってるわよ。私は…』

「しかも、自分の父親まで嫌いとはな。」

「汚らわしいもの。」

「汚らわしいって…」

周も桂花の毒舌には苦笑いを溢していた。

「袁紹様が女性で良かったな。本当に。」

「そうね。そういえば、アンタはこれからどうするの?」

「いつまでも親の世話になるわけにいかないし…旅に出るよ。」

「旅に?」

「ああ、俺がこの人の為に働きたい。この人の為に剣を振りたい。つて人を実際に見てみたいかなって。」

「だ、大丈夫なの?旅の最中に賊なんかに襲われたら…」

「桂花、心配してくれんのか?」

「ま、まさか。アンタがの垂れ死のうが、賊に殺されようが私には関係ないわよ。」

「相変わらずきついなあ。でもジュンイク様の言う通り、これから戦乱の時代が来るならどの国でも新兵の募集はするだろうしな。どうにかなるさ。」

「無策過ぎるわね。」

『まあ、それがアンタの良い所でもあるんだけどね。』

「なあ、桂花。」

「何よ?」

「もし…俺のいる国と戦ったら…」

「私の全ての知識を持って潰すわよ。」

「おいおい。冗談だろ？あんまり無駄な死人の出る策はやめてくれよ。」

「そんなの分からないわよ。殺されたくないなら……」

『言いたい。私と……』

「桂花？」

急に黙り込んだ桂花を周は覗きこんだ。

「せ、せいぜい死なないように鍛錬するのね。」

「当然」

『…バカ。』

桂花と幼馴染（後書き）

さて、如何でしたでしょうか？

作者の妄想とオリジナルですって言われる質問はしないで下さいね。ただ、聞きたい事があれば何でもどうぞです。

肌に合わなかった方は…もう読むの止めましょう、笑

とりあえず話は麗羽のところにいく桂花からにしてみました。

もう一度言います。

この小説のあらすじ・キーワードのご理解をよろしくお願い致します。

鍛錬の時間

「数えてるか？」

「ちゃんと数えてるから黙ってやりなさいよ。」

今日は桂花が朝から周の鍛錬に付き合っていた。と言ってもこれは昔からの光景である。周が鍛錬という名の筋トレをしている傍で、椅子に難しい本を読みながら座る桂花。

「桂花。」

「まだよ。」

「違う違う。あのさ…乗ってくれない？」

「乗る？」

桂花は首を傾げて周を見た。

「アンタ、何を言ってるの？」

「背中だよ。背中。」

「背中？」

「そう背中。今からやる鍛錬の手伝いしてくれよ。」

「どうして私がアンタの手伝いをしなきゃいけないのよ。」

「別に本読んでるだけだろ。」

「この本が大切なのよ!!アンタの鍛練が私から言えばこの本なの
!!!」

「ふうん。」

「何よ。文句あるの?」

「いえいえ。」

「それで。」

「ん?」

「私はその…どこに乗れば良いのよ?」

桂花は少し顔を赤くして周に尋ねた。

「なんだ、結局乗ってくれるのか?」

「うーうるさいわね!!こっちまで歩いて来てあげたんだから…その…」

「じゃあ背中に乗ってくれるか?」

「背中ですって!?!」

「嫌か？」

「べ、別に良いわよ。」

すると周は腕立て伏せの体勢になった。

「乗って良いぞ。」

周に言われた桂花はちょこんと背中に乗った。

「周…なんか犬みたいね。」

『周の背中…暖かい。私…重くないかな。』

「うるさい。」

「降りようかしら。」

「冗談冗談。お願いします。」

「それで良いわよ。」

「じゃあ、そのまま頼むな。よいしょつ。」

「キャッ…!」

「おいつ。変な声出すなよ。」

「急に下がるから吃驚したじゃない!」

「ごめんごめん。」

「これを繰り返すの？」

「流石、軍師様。察しが良いようです。」

「当然じゃない。腕を鍛えるのね。」

『実は前に周の鍛練を見て覚えてただけだけどね。』

こうして周の背中に桂花を乗せた腕立て伏せが始まった。

「周、グラついてるわよ？本がゆっくり読めないんだけど？」

「き、気をつけるよ。」

「周、さっきより下がりが浅いんじゃないの？手抜きしてないわよね？」

「し、してないぞ。」

桂花は本に視線を向けながらも周に指摘も忘れない。

『ちょっと厳しいかしらね？ふふふ』

桂花は笑顔を浮かべながら本に目を通していった。そして…

「これで最後お！！」

周の腕立て伏せがようやく最後を迎えた。

「桂花、ありがとう…桂花？」

周が最後の1回を終えて桂花の姿を探したが、見当たらなかった。

「桂花…どこ行ったんだ？」

周が周りを見渡していると向こうから歩いてくる猫耳フードの女の子が見えた。

「桂花。どこ行ってたんだ？」

「…はい。」

「水を持ってきてくれたのか？」

「あゝ腕が疲れたわ。飲むの？飲まないの？飲まないなら捨てるけど…」

「いただきます…！」

周は桂花から水筒を受け取ったというより、取った。

「ゴクッゴクッぷはあ…！生き返るう。」

「全く、大袈裟なんだから。」

「水筒ありがとうな桂花。」

「わゝわざわざお礼を言う程の事じゃないでしょ。」

「分かってないなあ。こういうちょっとした事が大切なんだよ。」

「へえ〜そう。」

『言われなくても分かってるわよ。』

「そういえば、この後は桂花は何かあるのか？」

「特にないけど。」

「何か食べに行こうぜ。」

「私はお金出さないわよ。」

「へいへい。」

鍛錬の時間（後書き）

あゝ周が羨まし過ぎる！！

桂花からの水筒…私も欲しい！！ オイ！！

そして桂花たん乗せて腕立てしたい！！ 落ち着け！！

今回の内容はほのぼのにしてみました

周の癖

周が鍛練を終えて、誘いを受けた桂花は街を歩いていた。

「桂花、何か食べたい物とかないか？」

「別に無いわね。周が食べたい物で良いわよ。」

『そういえば…周が食事に誘ってくれるなんて珍しいわね。』

周と桂花は幼馴染み。親同士も仲が良くお互いの家にお邪魔して食事を食べる事はよくあるが、周の誘いで店に食べに行く事は決して多くなかった。

『もしかして、周のやつ私の為に？』

「ねえ。」

「ん？」

「どうして店で食べるのよ？お金掛かるじゃない。」

「それは…その…」

周は言葉を詰まらせた。そして周は自分の頬らへんを軽く触った。

『出たわね。周の癖が。』

これは周の癖である。周は何か誤魔化したい時には必ず頬に軽く触れる。勿論、幼馴染みの桂花はそれを知らない筈はない。

「周…私、隠し事されるの嫌いなだけけれど？」

「べ、別に隠してるわけじゃ…へっ？あー！！俺、またやってたか？」

「ええ。」

「くっそ〜」

「それで、どうしてお店なのよ？」

「その…」

「あーもう！！言いたい事があるならハッキリ言いなさいよ！！」

「わ、分かったよ。その…」

周は目を瞑り一息吐いた。そして…

「た、ただ桂花が此処を離れる前に好きな物を食べさせてやること思ったんだよ！！どうだ！！ハッキリ言ったぞっ！！」

周の息は荒い。顔も誰が見ても分かるくらい赤くなっていた。

「クスクス。」

「まあ。大胆ね。」

周と桂花は飲食店を探し通りを歩いていった。つまり、今の会話は通りのど真ん中で繰り広げられていた。時間は丁度昼時、通行人も多い。

「」…」

桂花は周に言われた事が直ぐに理解出来なかった。どうせ自分を只の幼馴染みしか思っていないだろう周に女性から見れば半ば告白のよくな言葉を言われた事に…しかし、直ぐに周の言葉・周りの通行人の視線に状況を把握し始めると同時に桂花の顔は一気に赤く染まりそして…

「」こおんの…バカああああ！」「」

桂花の声が辺り一帯に響いた。

ザッ

桂花は大声を出すと黙ってその場を離れた。

『アイツっ！！いきなり何を言ってるのよ！！』

桂花は顔が赤いまま…目的もなく歩いていった。

『私の為に…バカじゃないの！！それもあんな通りのど真ん中で！！埋めてやる！！埋めてやる！！埋めてやる！！埋めてやる！！』

この後…2人は会う事もなく1日が終わった。勿論、桂花が寝られ

ない夜を過ごしたのは必然である。

周の癖（後書き）

はい、作者の気分と欲望のままに書かせていただいています 笑

次回も良かったらお楽しみにです

私塾

「…完全な寝不足だわ。これも全て周のせいよ。」

前日の周の言葉に全く眠れなかった桂花は少し眠たそうな顔で街を歩いていた。今回はいつも持っている難しい本は手にしていない。今日は朝から冀州に行くので自分の住んでる街を改めてゆっくり見て歩こうと思っていたのである。

「うう、眠いわね。とんだ計算外だわ。」

勿論、寝不足で歩き回る事は桂花も予想外であった。

「これも全部…あつ。」

1人ブツブツ呟く桂花の最初の目的地に到着した。

「見る影は…まだ残ってるわね。」

桂花が最初にやってきたのは桂花が長い間通っていた私塾である。今は既に私塾としての機能は無いが建物だけが残っている。

「入っても…いいのかしら。」

桂花は辺りを軽く見まわしてから入口のドアに手を掛けた。

ギ、ギ、イ、イ、イ、イ

放置されていて古くなっている為か、古くさい音になった。

「…懐かしいわね。」

桂花は私塾の室内に入り自然と言葉が出た。別にそこには生徒や先生がいたり、椅子や机があったわけではなかったがその空間に何か懐かしさを感じていた。

「私はよくこの変に座ってたのよね。」

自分がよく座ってたであろう場所に来て桂花は腰を下ろした。

「そうそう、前に座ってる奴の頭がこの席だと邪魔だったのよね。そして、隣にはいつも周がいた。というより、いてくれたのかもしれないわね。」

『私は変わり者に…というより厄介者に思われただろうな。自分の意見と違ったら教えを請う立場にも関わらず勝手に意見したり、簡単過ぎる内容の時には途中で勝手に出て行ったり…問題児ね。』

桂花はそんな過去を思い出したらニヤけていた。

『そういえば…周が私塾に来なかった時は、実は私も直ぐに抜け出して帰ってたのよね。あんな男…どうして好きになったのかしら。男なのに…別に何か特別な才能もないし、只の昔からの幼馴染の男ってだけなのに。』

「ふあゝ。なんだか色々思い出してたら、眠くなってきたわね。」

桂花は少し仮眠をするつもりで横になった。懐かしい雰囲気と懐か

しい記憶に包まれて…

私塾（後書き）

桂花の散歩話に突入です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2341z/>

桂花と幼馴染

2011年12月15日02時34分発行